高尾山富士浅間社鳥居・玉垣改修事業
浄財勧募のお願い

ご信徒の皆様におかれましては、御本尊飯縄大権現様の御加護に浴せられまして、日々ご清適にお過ごしのこととお慶び申し上げます。

また平素は当山興隆のため、格別の御高配を賜わり、厚く御礼申し上げます。

さて、武州・甲州の乱国渦中の天文年間に、時の領主 北条氏康により、高尾山浅間社が建立されて以来、当山は関東における富士信仰の新たな拠点となりました。平成十九年に再興された、「霊峰富士登拝修行」が昨年で第十箇度を数えるようになり、今なお富士抖擻修行の拠点であり続けております。

しかしながら、建立以来修復を重ねて参りましたが、数多の月日を重ねたことで浅間社周辺の鳥居・玉垣の損傷いちじるしく、この度当山貫首により、改修事業が発願されました。

つきましては、全国有縁のご信徒の皆様におかれましては、この浄業に大いなるご理解と格別の御信助を賜りたく、茲に謹んでお願い申し上げます。

合掌

玉垣の御奉納

外側刻銘　小石柱　八十二本　金　十五万円也

内側刻銘　小石柱　百十二本　金　十万円也

寄進者の御芳名は玉垣に刻み、高尾山に末永く留め、貴家の御繁栄を御祈念申し上げます。

＊玉垣の奉納数には限りがございますので、満数になり次第締め切らせて頂きます。

＊御来山の折の御志納につきましては、御護摩受付所にて承っております。

尚、書留で御志納される場合は、必ず「高尾山浅間社改修事業志納金」とお書きください。

御礼と御報告

これまで御奉納を御願い致しておりました、浅間社玉垣の大石柱と中石柱の御奉納につきまして、熱心なる信心のおかげをもちまして満数に達しましたことに対し、御礼と御報告を申し上げます。

尚、数に限りがある為、御奉納を受けることが出来ず、ご信徒様に大変ご迷惑をお掛け致しました事につきまして、心からお詫び申し上げる次第であります。

大本山 高尾山薬王院

おはなし散歩道

とっついたり

町田市　大澤桃代

春の日暮れのことです。お腹をすかせた子だぬきが山から村へと下りてきました。

村外れの神社からいい匂いが流れてきました。たぬきは境内に飛び込みました。

～たぬき　こいこい
　遊ぼじゃないか～

わらべ歌が聞こえます。誰かいます。たぬきはあわてて庭木のかげに入ります。人間に見つかったらたぬき汁にされてしまうのです。

昔から決まっています。それでもいい匂いに誘われ、そーっと葉っぱの間から覗きました。

女の子が二人、遊んでいました。五つか六つの子どもです。はしゃぎながら境内をぐるぐる走り回っています。

動くたびに甘い匂いがします。女の子の匂いが甘いなんて、ちっとも知りませんでした。

今のうちに逃げようとたぬきは思いますが、楽しげな様子に目が離せません。女の子らはおかっぱ頭です。おそろいの赤い鼻緒のゲタをはいて、白い着物と小豆色の着物を着ています。双子でしょうか。

たぬきは女の子らに見とれてしまいました。

～とっつきひっつき
　遊ぼじゃないか～

女の子らはそしらぬ顔で、歌いながら遊んでいます。歌がたぬきのまわりを、ぐるぐると回っています。

――楽しそうだな。

たぬきは葉かげから顔を出して、すぐに引っこめました。これは人間のワナです。甘い匂いで誘い、たぬき汁にするに違いないのです。

――危ない、危ない。

たぬきは、植木を伝い、社の裏に回ろうと思いました。そこから山へ逃げるのです。

そーっと、サッキの茂みを超え、鳥居をくぐり、力石にかくれて女の子らを伺いました。

そのとたん、小豆色の着物の子がつないだ手を離して、力石の方へと走ってきました。白い着物の子も追いかけてきます。

――いけない！

たぬきは、社の裏へと走ります。そこで、ほっと胸をなで下ろした時でした。ガサガサッ、と足音がして、女の子らが「見ーつけた！」と、叫びました。

たぬきは、とっつかれたように動くことができません。夕方の風に、甘い匂いがますます強くなりました。目まいもします。そして手を引かれるまま、ふらふらと鳥居の下まで戻ってしまいました。

「たぬきさん、遊ぼ！」

女の子らは、たぬきの手を取り歌います。

～たぬき　きたきた
　遊ぼじゃないか
　とっつきひっつき
　遊ぼじゃないか～

歌がどんどん大きくなって、いつしか、たぬきと女の子らは手を取り合い境内をぐるぐる回っていました。甘い匂いにたぬきの腹がぐうぐう鳴っています。

「そうれ、とっついたり！　どん！」

ふいに、白い着物の子が言って、たぬきにおいかぶさりました。それから小豆色の子も乗っかってきます。

たぬきが転がります。そして。みんなでごろごろごろ……。

たぬきが、はっと気がつきました。女の子らがいません。甘い匂いだけが漂っています。

社のとびらが開いています。そこに、大きなあんころもちが二つ供えられていました。

たぬきは、目をぱちくりさせました。それから、あんころもちを平らげました。たぬきは、当分この村に住もうと思いました。

（ふ元）

（さし絵・小出　茂）